



Blue
Planet
Prize

2016 年 6 月 15 日
公益財団法人 旭硝子財団

2016 年（第 25 回）ブループラネット賞の受賞者

■パバン・シュクデフ氏（インド）

■マルクス・ボルナー教授（スイス）

公益財団法人旭硝子財団（理事長 石村和彦）のブループラネット賞（地球環境国際賞）は、今年で第 25 回目を迎えました。本賞は、地球環境問題の解決に関して社会科学、自然科学／技術、応用の面で著しい貢献をされた個人、または組織に対して毎年 2 件贈られるもので、当財団理事会、評議員会は本年度の受賞者を次のように決定しました。

1) パバン・シュクデフ氏（インド）

国連環境計画（UNEP）親善大使、GIST（Green Indian States Trust）創設者・理事、GIST アドバイザリー 設立者・CEO、エール大学ダヴェンポートカレッジ アソシエートフェロー



シュクデフ氏は、包括的グリーン経済に移行するための経済的合理性を有しながら実用的な測定基準を開発した先駆者である。この移行には企業こそが決定的な役割を果たすことを示し注目を集めた。さらに氏は、公共政策と経済活動に、生態系サービスの価値を如何に組み込むかを示し、持続可能性に向けた基準を企業、地方、国家の各レベルで開発し、包括的グリーン経済の発展を加速させた。

2) マルクス・ボルナー教授（スイス）

グラスゴー大学名誉教授、フランクフルト動物協会アフリカプログラム前ダイレクター、ネルソンマンデラアフリカ工科大学（タンザニア）助教授



ボルナー教授は、過去40年間、アフリカにおける絶滅寸前の野生生物保護や保護区内生態系の保全・管理活動の最前線に立ってきた。教授は、個々の種の保全には、生態系全域での総合的保全が必要であり、セレンゲティ国立公園の場合はタンザニア国民が生態系の保全に対して貢献し、コミットメントをもつことが必要であることを看破した先駆者の一人である。活動の指針として、我々が住む惑星を健全に生存させるには、手つかずの自然、種の多様性、自然美が絶対的に不可欠であるという原則を掲げている。

- 受賞業績 1 件に対して、賞状、トロフィーおよび副賞賞金5千万円が贈られます。
- 表彰式典は 11 月 16 日（水）にパレスホテル東京（東京都千代田区）で挙行政され、翌 11 月 17 日（木）に受賞者による記念講演会が国際連合大学（東京都渋谷区）で開催されます。

※本リリースは環境記者クラブ、環境記者会に同時配布しております。当財団 HP でも 15 日 15 時からご覧いただけます。

※本年度受賞者の写真は、当財団 HP（<http://www.af-info.or.jp>）から入手いただけます。

公益財団法人 旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ2F Tel 03-5275-0620 Fax 03-5275-0871
E-mail: post@af-info.or.jp URL: <http://www.af-info.or.jp>

本年度（第 25 回）の選考経過

国内 680 名、海外 700 名のノミネーターから 109 件の受賞候補者が推薦されました。候補者の分野は、多い順に生態系が 26 件、環境経済・政策 22 件、気候・地球科学 17 件、複合領域 12 件などでした。

候補者は 33 ヶ国にまたがっており、途上国からの候補者は 29 件あり、全体の 27%に相当します。

選考委員会による数次の審査をもとに、当財団の理事で構成する顕彰委員会に諮った後、理事会、評議員会で、1 件はパバン・シュクデフ氏が、もう 1 件はマルクス・ボルナー教授が受賞者として正式に決定されました。

歴代受賞者

1992	真鍋淑郎博士（米国） 国際環境開発研究所－IIED（英国）	2005	ニコラス・シャックルトン教授（英国） ゴードン・ヒサシ・サトウ博士（米国）
1993	チャールズ・D・キーリング博士（米国） 国際自然保護連合－IUCN（本部；スイス）	2006	宮脇昭博士（日本） エミル・サリム博士（インドネシア）
1994	オイゲン・サイボルト博士（ドイツ） レスター・R・ブラウン氏（米国）	2007	ジョセフ・L・サックス教授（米国） エイモリ・B・ロビンス博士（米国）
1995	バート・ボリン博士（スウェーデン） モーリス・F・ストロング氏（カナダ）	2008	クロード・ロリウス博士（フランス） ジョゼ・ゴールデンベルク教授（ブラジル）
1996	ウォーレス・S・ブロッカー博士（米国） M.S. スワミナサン研究財団（インド）	2009	宇沢 弘文教授（日本） ニコラス・スターン卿（英国）
1997	ジェームス・E・ラブロック博士（英国） コンサベーション・インターナショナル（米国）	2010	ジェームス・ハンセン博士（米国） ロバート・ワトソン博士（英国）
1998	ミファイル・I・ブディコ博士（ロシア） デイビッド・R・ブラウワー氏（米国）	2011	ジェーン・ルブチェンコ博士（米国） ベアフット・カレッジ（インド）
1999	ポール・R・エーリック博士（米国） 曲格平（チュ・グエピン）教授（中国）	2012	ウィリアム・E・リース教授（カナダ） および マティス・ワケナゲル博士（スイス） トーマス・E・ラブジョイ博士（米国）
2000	ティオ・コルボーン博士（米国） カールヘンリク・ロベール博士（スウェーデン）	2013	松野 太郎博士（日本） ダニエル・スパーリング教授（米国）
2001	ロバート・メイ卿（オーストラリア） ノーマン・マイアーズ博士（英国）	2014	ハーマン・デイリー教授（米国） ダニエル・H・ジャンゼン教授（米国） および コスタリカ生物多様性研究所（コスタリカ）
2002	ハロルド・A・ムーニー教授（米国） J・ガスターヴ・スペース教授（米国）	2015	パーサ・ダスグプタ教授（英国） ジェフリー・D・サックス教授（米国）
2003	ジーン・E・ライケンス博士（米国） および F・ハーバート・ボーマン博士（米国） ヴォー・クイー博士（ベトナム）	2016	パバン・シュクデフ氏（インド） マルクス・ボルナー教授（スイス）
2004	スーザン・ソロモン博士（米国） グロ・ハルレム・ブルントラント博士（ノルウェー）		

■本件に関するお問い合わせ先

公益財団法人 旭硝子財団
事務局 長 安田 哲朗

〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ 2 階
TEL : 03-5275-0620 FAX : 03-5275-0871
e-mail : post@af-info.or.jp
URL : <http://www.af-info.or.jp>

受賞者の業績及びプロフィール

パバン・シュクデフ氏 (Mr. Pavan Sukhdev)

パバン・シュクデフ氏の功績

シュクデフ氏の大きな業績の一つは TEEB を成功に導いたことである。シュクデフ氏は環境評価の第一人者であり、TEEB の成功は、現代社会に対して自然の価値の認識と対応をせまる環境評価とグリーン会計を主流化することに対する氏の並々な情熱に負うところが大きい。

GIST (The Green Indian States Trust) の創設と展開 (2004 年～)

シュクデフ氏は、持続可能な開発を目的に 2004 年に NGO 組織である GIST を設立した。当初はインドの州政府レベルを対象とした活動であったが、現在では「GIST アドバイザリー」という関連組織を通じて、海外も含めた国や企業の環境会計の促進に貢献している。環境会計に組み込む対象として、森林、農地、水資源などの自然資本や、社会資本、人的資本（保健および教育）を網羅している。環境会計を徹底することにより、人間の幸福と社会的公正を拡大する一方で、環境リスクと生態系の破壊を減らすグリーン経済の実現を目指している。

TEEB (The Economics of Ecosystems and Biodiversity) (2007～2010 年、第 1、2 フェーズ)

TEEB は 2007 年、ポツダムで開催された G8+5 環境大臣会議の際に提唱された世界的プロジェクトである。生物多様性や生態系サービスを経済的に価値付け、政策立案者、企業、市民の意思決定にこうした価値を組み入れることにより、生物多様性の保全のための経済的・社会的根拠の確立をめざす活動である。その活動は、(1) ボン開催の CBD COP-9 で発表された中間報告、(2) 名古屋開催の CBD COP-10 で発表された最終報告、(3) 現在進行中の実行フェーズ（表参照）の 3 つのフェーズから成る。

シュクデフ氏は GIST および環境会計開発を主導してきた実績を買われ、TEEB の研究リーダーに指名され、第 1、2 フェーズを指揮した。シュクデフ氏は、貧困の撲滅と世代間の公平性を重要視し、TEEB 活動の目的の一つに据えている。第 1、2 フェーズで打立てた考えを実践する第 3 フェーズでは、活動主体が TEEB 以外の各国政府、NGO、企業などの組織に移り、こうした取り組みが複合して、生物多様性条約-COP10（名古屋開催）で決められた愛知目標の達成に貢献することが期待されている。

TEEB 報告書は、先進国と発展途上国両方の政府やビジネスリーダー、環境 NGO に大きな影響力を及ぼしてきた。特に、ブラジル、中国、インド、グルジア、ベルギー、ドイツ、オランダおよびノルウェーの政府は、生物多様性条約-COP10 以降 TEEB プロジェクトの継続あるいは開始を決定し、生態系サービスの価値を政策立案の枠組みに組み込むようになった。さらに、ビジネスの自然に対する影響と依存度を評価することを目的とし、可能な限りビジネス活動の外部性を公表、管理することを目指して、グローバル・レポーティング・イニシアチブ (GRI)、国際統合報告委員会 (IIRC)、国際自然保護連合 (IUCN)、世界自然保護基金 (WWF)、コンサベーション・インターナショナル (CI) などの多くの世界的な組織、ならびに英国環境・食糧・農村地域省 (DEFRA)、シンガポール経済開発庁 (EDB)、イングランド・ウェールズ勅許会計士協会 (ICAEW) などの機関は、2012 年にビジネスの枠組みと基準を制定するための連合「TEEB for Business Coalition」を組織した。

TEEB は、生態系サービスの多大な恩恵の価値を我々に教え、限りある自然の濫用とそれに伴う生

生態系サービス崩壊の真の代償を気付かせ、生物多様性と生態系をさらに十分に保全するための政策改善とビジネス変革の具体的ビジョンを示した点で、画期的な成果を残した。

「Corporation 2020」とエール大学（2011年～）

2011年、シュクデフ氏はエール大学森林環境学部にて McCluskey Fellow に選出され、TEEB に関する初の大学院課程を創設し、教鞭を執った（TEEB@Yale）。エール大学在籍中に執筆した著作『企業 2020』の出版と同時期に、シュクデフ氏により持続可能な企業活動を実行するための国際的イニシアチブが提起された。このイニシアチブは、コントロールを高めたレバレッジ、利益課税から資源課税への課税法のシフト、広告宣伝における責任と説明責任の増大、統合財務報告書「IR」といった「ミクロ政策」主導の変化により支持される。これにより、正しい規制と政策で再現、評価、支援が可能な企業のリーダーシップモデルによって環境と社会にとって健全な「economy of permanence」を実現するというシュクデフ氏の考えに基づく一連の重要戦略が促進される。2012年のリオ+20で始動したこのイニシアチブは、企業の持続可能性の問題を十分に解明した上で解決策を提案している。シュクデフ氏は現在エール大学ダヴェンポートカレッジでアソシエイトフェローを務める。

表：TEEB 設立の経緯と活動の内容

項目	活動主体	内容
設立 2007年3月	G8+5会議	●2007年3月ポツダム開催のG8+5カ国環境大臣会合で、生態系と生物多様性の損失に関して「気候変動の経済学に関するスターンレビュー」と同様のプロジェクトを行うことについて検討する必要性が表明された。 ●ドイツ環境大臣シグマール・ガブリエル氏が、欧州委員会環境担当委員スタブロス・ディマス氏の支援を受け、この研究に取り組むことを引き受けた。 ●ドイツ環境大臣と欧州委員会環境担当委員によりパバン・シュクデフ氏がプロジェクトリーダーに指名された。
第1フェーズ （設立～ 2008年5月）	TEEBイニシアチブ （シュクデフ氏がリーダーを務め、科学者、ビジネスリーダー、政策立案者500名余りで構成）（*）	●生物多様性と生態系サービスの価値ならびに「通常通りのビジネス」によるこれらの損失の認識の検討 ●2008年5月ドイツのボンでの生物多様性条約第9回締約国会議（CBD COP-9）の閣僚級会合にてTEEB中間報告が発表された。 （*）出典：関連ウェブサイト（www.teebweb.org）
第2フェーズ （2009年～ 2010年）	同上	●生物多様性および生態系サービスの価値の可視化（一部途上国での「GDP of the poor」の評価を含めた、経済的、社会的な評価）および政策立案、行政、ビジネスへのその価値の取り入れ方の検討 ●2010年10月名古屋で開催の生物多様性条約第10回締約国会議（CBD COP-10）にて、4部構成のTEEB最終報告書が完全公表された。
第3フェーズ （2011年～ 現在）	TEEBプロジェクト以外の組織 （各国政府、NGO、プロジェクトなど）	●第1フェーズ、第2フェーズで打ち立てた考えを実践。 欧州委員会が支援する「TEEB Country Studies」（ブータン、エクアドル、リベリア、フィリピン、タンザニア）、多数の「TEEB-inspired Country Studies」（日本の他、20カ国が参加を検討） ●TEEBの考え方を受け継いで、現在、Natural Capital Coalition（NCC）などの多数の活動が行われている。NCCは、ビジネスの意思決定における自然資本の価値を認識、統合するための国際的連携活動であり、2016年7月ロンドンにて世界共通の「自然資本プロトコル（NCP）」を始動する予定である。 ●2014年、TEEB for Agriculture & Food（「TEEB-Agri-Food」）プロジェクトが、ノルウェー政府そして米国のGlobal Alliance for the Future of Foodの支援を受けて始動。パバン・シュクデフは、プロジェクトのスペシャルアドバイザーに任命され、2015年12月パリで開催されたCOP-21のGlobal Landscapes Forumにおいて中間報告が出された。

<略歴>

学歴

1976	コレージュ・ド・レマン（スイス）
1978	ドーバーカレッジ（英国）
1981	オックスフォード大学（英国）
1983	英国勅許会計士協会（英国） 経済・会計・法律学位

金融に関連する経歴

1983～1994	オーストラリア、ニュージーランド銀行グループ（在インド及びロンドン）
1994～1998	ドイツ銀行グローバルマーケット部門長（インド）
1998～1999	ドイツ銀行アジアグローバルマーケットビジネス COO（シンガポール）
1999～2003	ドイツ銀行アジアグローバルマーケット金融部門長（シンガポール）
2003～2005	ドイツ銀行グローバルエマージングマーケット部門 COO（シンガポール）
2005～2006	ドイツ銀行グローバルマーケット本社（ロンドン）
2006	ドイツ銀行 GMC（Global Markets Centre）ムンバイ 設立
2008～2011	サバティカル休暇およびドイツ銀行から国連環境計画（UNEP）へ出向
2011 年 3 月	ドイツ銀行および UNEP を退職し、2011 年から 2012 年までエール大学で McCluskey Fellow の役職に就任

グリーン経済関係の活動

2004	GIST（The Green Indian State Trust）創設者・理事
2008～2010	TEEB（The Economics of Ecosystems and Biodiversity）研究リーダー
2008～2011	UNEP GEI（グリーン経済イニシアチブ）責任者
2011～	GIST アドバイザリー設立者・CEO
2012	キャンペーン展開および著作『企業 2020』出版

<主な受賞歴>

2010	Personality of the Year（Environmental Finance）
2011	McCluskey Fellowship（エール大学森林環境学部） IEEM（Institute of Ecology and Environmental Management）よりメダル授与（ロンドン）
2012	UNEP 親善大使 自然保全に対するサリム・アリ国際自然保護賞（ボンベイ自然史協会、BNHS）
2013	Gothenburg Award for Sustainable Development（Gothenburg 市）
2015	KfW ベルンハルト・グジメック賞（KfW Stiftung 財団、フランクフルト）

マルクス・ボルナー教授 (Prof. Markus Borner)

マルクス・ボルナー教授の功績

1983年よりボルナー教授はフランクフルト動物協会 (FZS) のアフリカプログラムディレクターとして、セレンゲティ国立公園にあるアフリカ地域事務所を本拠に活動を行ってきた。ボルナー教授はタンザニア国立公園 (TANAPA) と協力関係を築き、セレンゲティ国立公園の野生動物と生態系について、長年にわたる科学的な調査研究に基づき生態系の保全および管理の仕組みを構築・実行してきた。

FZSは、グジメック教授の下で1958年にセレンゲティ国立公園の生態系保全プログラムを開始した。その後、この生態系保全プログラムの運営とグジメック教授の右腕を確保すべく、1977年にボルナー教授を招聘した。現在アフリカプログラムは、ボルナー教授が大きな成功をもたらしたことで、一層の評価を受けている。

当初より、教授はTANAPAの協力の下で野生動物の生態、特にゾウやサイの個体数の変化、シマウマやヌーなどの生息域や移動経路に関する先駆的な研究を数多く行なってきた。これらの研究により、野生動物の実態が初めて詳細に解明されるとともに、人間による密猟や開発がいかにより野生動物を絶滅の危機に追い込んでいるかが明らかにされた。教授は自ら飛行機を操縦し、年間100,000kmもの距離を飛行し地上の生態系を俯瞰する観察も含めた広範囲に渡る精力的な調査研究を行った。後にこれらの研究は、(1) マラ川での大型水力発電ダム建設、(2) 国立公園中心部での高速道路建設、という国立公園に対する二つの自然破壊の脅威から救った。

1977年にタンザニアとケニアの国境が閉鎖されたことで、エコツーリズムを含めたタンザニア観光産業は大きな打撃を受け、セレンゲティ国立公園の保全活動は財政危機に瀕した。この危機を切り抜けるためボルナー教授は、FZS内に基金を立ち上げ、公園の巡視員や監視人への給与の支払いを再開し、道路をメンテナンスし、車両を更新するなどの方策を講じることで、公園の体系的な管理を回復させた。その後、保護地域の全体管理計画作成に尽力し、エコツーリズムへの道が開かれた。現在、観光はタンザニアの主要な外貨獲得手段であり、毎年国に20億ドルをもたらしている。観光を新たな経営計画に組み入れたボルナー教授の公園運営は、この地域の自然の保全を進める上で大きな進歩をもたらした。

さらにまた、教授は、政府関係者、外交官、ジャーナリスト、環境運動家、科学者等を親しく自宅に招き、セレンゲティ生態系の雄大な自然を広く紹介すると共に、一方で、政府関係者や個人等から広く資金を集め、保全プログラムの維持・遂行に邁進してきた。

この時期に実施されたイニシアチブとして、絶滅の危機にあるサイの繁殖と保護はよく知られている。ンゴロンゴロ保全地域でサイ保全プログラム、セレンゲティのモル地域とケニアのマラ狩猟地域でクロサイ保全プログラムを実施した。アフリカ全体でサイの保全を行うため、サイは南アフリカから空路で運ばれ、ンゴロンゴロ保全地域に放された。

このような大規模なスケールでの生態系保全プログラムは世界的にも他にあまり例を見ず、セレンゲティ国立公園が数少ないその一つである。ボルナー教授は、共同研究者と共にこれまで2000件を超えるセレンゲティに関する科学論文を発表しており、セレンゲティは現在世界で最も広範な研究がなされている地域となっている。

ボルナー教授はセレンゲティの生態系の保全“関連”活動にも寄与しており、野生生物に適した緩衝地帯を設け、地元とセレンゲティ生態系フォーラムに収入をもたらすことで全利害関係者を生態系に関わらせることに成功し、公園に隣接する形で野生生物管理地域を確立するのに貢献した。

以上のように、教授は、科学をベースとした生態系の包括的な保護・管理の実施、地元の人々との協力体制の構築、エコツーリズムを通じた地元経済発展への開発など、自然保護と地元経済の持続可能な開発を目指した仕組みを打ち立て、実践によってその方法の正しさを証明してきたのである。またこの方法の正しさをセレンゲティ以外のエチオピア、ケニア、コンゴ、ザンビア、ジンバブエなど周辺国においても実証してきた。今日セレンゲティ国立公園はタンザニアの観光資源の柱となっているが、教授のこれまでの活動は、生態系保全・実践の先駆的な成功例であり、世界の生態系保全活動に大きな影響を与えている。

教授は2012年にFZSのアフリカプログラムダイレクターを退任した後も、グラスゴー大学名誉教授として野生動物および生態系を保全するための教育研究を継続している。同時に、引き続きセレンゲティ国立公園の生態系保全に全力を尽くし、セレンゲティ国立公園を横断する高速道路の建設計画に対処するための詳細な研究を現在も行っている。

<略歴>

学歴

- 1972 チューリッヒ大学（海洋生物学研究室） 卒
- 1979 バーゼル大学、動物学博士

経歴

- 1972 スマトラにてサイ、トラの研究に着手、（世界自然保護基金、WWF）
- 1977-1983 フランクフルト動物協会（FZS）職員となる。FZSのグジメック教授の右腕として活躍。FZSによりアフリカに派遣され、家族とともにアフリカ ビクトリア湖にあるRubondo島に転居。
- 1983 FZSのアフリカプログラムダイレクターを拝命。予てよりセレンゲティ国立公園の改善、保全に注力していたFZSより派遣され、同国立公園を本拠地として活動を開始。
- 1984 タンザニア野生生物保護基金創立メンバー
- 1984～2003 タンザニア野生動物管理カレッジ取締役会メンバー
- 1989～2004 タンザニア国立公園保全委員会委員長および役員
- 1991～2001 タンザニア、ンゴロンゴロ保全地域当局役員
- 2012 フランクフルト動物協会のアフリカプログラムダイレクターを退任。

<主な受賞歴>

- 1994 ブルーノ・H・シューベルト賞（ブルーノ・H・シューベルト財団、フランクフルト）
- 2000 Special Conservation Award Tanzania National Parks（タンザニア国立公園）
- 2009 IEDC Excellence in Economic Development Awards（国際経済開発評議会）
- 2012 インディアナポリス賞ファイナリスト（インディアナポリス動物園）

受賞の辞

パバン・シュクデフ氏

ブループラネット賞受賞という素晴らしい名誉に恵まれ、旭硝子財団に感謝申し上げます。表彰いただき、また私自身が感銘を受け学ばせていただいた第一人者の方々と肩を並べる栄誉にもあずかり、大変恐縮いたしております。

このたび賞をくださった活動組織に寄与したすべての人々にこの瞬間を捧げます。特に、大規模になっても成長を続ける TEEB に携わる皆さん、GIST の仲間や協力者の方々、私が教えるエール大学の学生の皆さん、業務に惜しみなく時間を割いてくださった優れたアドバイザーの方々のお陰です。

ブループラネット賞の受賞は、自然の経済的価値を目に見える形で示し、政策立案者やビジネスリーダーの対応をより良いものとし、企業を再計画し、持続可能性の評価尺度や会計システムを改善・実行する、という私の取り組みを今後も続けていく上で励みとなります。これらはすべて、もはや機能していない支配的な現在の経済モデルを、恒久性のある包括的なグリーン経済に変革するのに非常に重要な領域です。

マルクス・ボルナー教授

今年のブループラネット賞を受賞し、大変恐縮しております。この名誉ある賞に値すると認められ、過去 25 年間にわたり旭硝子財団よりこの賞を授与されてきた輝かしい受賞者の皆さまに加わることができ、非常に光栄に思います。

私はこれまでの経歴を通じて、自分自身にとって大きな意味を持ち、シンボリック存在であるセレンゲティ国立公園をはじめ、アフリカにおける重要な保護区の保護につながる活動を行うことができ、非常に幸運であり、光栄でした。私の貢献はほんの些細なものでしかなく、この功績は、国土の 25% を保護区に指定し、世界の最貧国の一つに数えられながら、自然遺産を保護するために最善を尽くしてきたタンザニアの人々によるものです。

原野、生物多様性、美しさは、私たち一人ひとりにとって重要なものであり、この青い地球が生き続け、健康であり続けるために欠かせないものです。

ゾウやサイが暮らす場所があり、ライオンが朝日を浴びながら唸り声を上げることのできる未来。そんな未来に通じる道を見つけるのをご支援くださいました旭硝子財団に心より感謝申し上げます。